

氏名	佐野 幹				
専攻分野の名称	博士（教育学）				
学位記番号	博甲第356号				
学位授与年月日	令和3年3月16日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士				
学位論文名	近代日本の教育場における「メロス伝説」のネットワーク形成過程とその読書材としての価値				
論文審査委員	(主査)	教授	高木 まさき		
	(副査)	教授	一柳 廣孝	教授	橋本 美保
		教授	岩田 美保	教授	泉 真由子
		教授	戸田 功		

学位論文要旨

太宰治の「走れメロス」は、1956（昭和31）年に教科書に収録されて以降、継続して採録され、現在では、ヘルマンヘッセの「少年の日の思い出」、魯迅「故郷」とともに中学校国語科教育における代表的な文学教材となっている。

この「走れメロス」がシラーの人質を典拠としていることは、太宰研究では常識的な事実となっているが、シラーの人質以外にも「走れメロス」と同じ構造を持つ類話が存在していたことはあまり知られていない。この類話は日本において近代以降、小説だけでなく、国語、修身、英語の教材や子ども読み物等によって領域、ジャンルを越境しつつ読書材として利用されてきたのである。

先行研究によれば、この類話は、ギリシャ・ローマを舞台としたピタゴラス派の団結の強さを伝える逸話として発生し、アラブ中東世界にも表れ、近代になって西洋から日本に流入してきた伝説であることが明らかになっている。だが、日本においては、この類話が教育場で普及した話だったことまではわかっているが、これがいつ、なぜ日本に流入し、その後、どのような広がりを見せ、そこにどのような教育的な意味があったのかはわかっていない。

そこで本研究では、「走れメロス」と同じ話型を持つ類話を「メロス伝説」と名付け、この日本の社会や教育に影響を与えてきた「メロス伝説」の全体像を明らかにし、日本の社会や教育場においてどのような教育的な価値や問題があったのかを解明することを目的とした。

本研究ではこの目的を達成するための方法として、二つの方法を組み合わせて研究に当たった。一つは、「メロス伝説」のネットワーク分析であり、もう一つは、そのテキスト分析である。

ネットワーク分析では、伝説の総体をネットワーク科学の視点からとらえ、グラフを作成し、テキスト相互のつながりを可視化した。これによって複雑化した「メロス伝説」同士のつながりが明らかにされ、テキストの中には、多くのテキストと相互関係（リンク）を持ち、後続するテキストに影響を及ぼすハブの役割を持ったテキスト（以下、ハブテキストと呼ぶ）が存在することが判明した。そのハブテキストとは『泰西勸善訓蒙』の「朋友ノ交」、『フェ

イマスストーリーズ』の「ダモンとフィシアス」、『高等小学読本』の「真の知己」、『中学修身訓』の「約束せば必ず遂げよ」、「赤い鳥」の「デイモンとピチアス」、シラーの「人質」、それから太宰治の「走れメロス」であった。

テキスト分析では、これらのハブテキストに焦点を当て、それぞれのハブテキストが歴史・社会・教育的状況との関係から読書材としてどのような価値があったのかを解明した。全てのメロス伝説を個々に検討することは現実的に難しいが、ハブテキストは、そのテキストが発行された時代に注目され、なおかつ、後世への影響力が大きいテキストである。そのため、このハブテキストとその後の伝播・受容状況を中心に検討することで、「メロス伝説」の全体的な意味の解明につなげたのである。

以上の方法により、本研究で明らかになったことと、成果は、次の通りである。

まず、第一に「メロス伝説」のネットワーク分析により、ハブテキストの存在が浮かび上がり、このハブを中心として「メロス伝説」が言語文化の領域を相互に移動し、ネットワークをかたちづくり、受容の裾野を広げてきたことが明らかになった。

また、またこのハブテキストの系統別伝播状況によって1～3期の時期区分を行った。第1期が、「朋友ノ交」を中心にネットワークの萌芽が見られた1870年代～1890年代まで。第2期が「ダモンとフィシアス」「真の知己」「人質」「約束せば必ず遂げよ」「デイモンとピチアス」の5つのハブテキストが流通し、国民全体に「伝説」が浸透しネットワークが形成された1900年代～1930年代まで。そして第3期が、「走れメロス」が台頭し、ネットワークが更新される1940年～1960年代である。

第二に、ハブテキストの検討を通して、第1・2期の「メロス伝説」には大きく二つの利用価値がみとめられていたことを明らかにした。一つ目は、道徳的な規範を示す規範感化材として価値づけられていたということ。二つ目は、この話が西洋に由来しており、西洋の文化を知るための言語文化財としての価値が認められたことである。

また、「メロス伝説」の価値は、ネットワークが日本の教育場に伝播・拡大するに従って合理化され、終局的には国民道徳に奉仕し国家を支える例話として機能していたことを指摘した。そして、戦時下における自己犠牲の精神の下地を作ることに加担していたことは、「メロス伝説」が関わった大きな問題として取り上げた。

第三に、第3期における「メロス伝説」においても、自己犠牲の精神の下地をつくる「規範感化材」として扱われた面があったことと、それから、戦前・戦中に日本国民に培われた、自己犠牲の精神が、教育内容を拘束し、また同時に教育が自己犠牲の精神を再生産していることを問題として指摘した。

第四に、「メロス伝説」が抱えた問題を解決する糸口の一つとして、「メロス伝説」を日本の国民に内面化した言語文化財としてとらえ、ネットワークそれ自体を読書材として活用することを提案した。

以上、本研究によって、文学の教材価値を歴史的な視座でとらえる重要性を示し、今後、文学による教育の問題は、日本の文化や国民性の問題としても考える必要があることを示唆した。